

北九州市における ITC 産業の裾野拡大と産学連携

財団法人国際東アジア研究センター（ICSEAD）では、一昨年来 ICT 産業クラスターの研究に取り組んでいる。昨年度は、ICT 産業の中でも特に、「ものづくり」に取り組んでいる企業に注目して、イノベーション活動と産学官連携の形成（あるいは、地域ネットワークの形成）の動向を調査し、その現状と課題を探ってきた。その結果、地域産業の活性化を促し、飛躍させるには、地域の核となる企業を中心とし、地域の特色にあった連携・仕組みが重要であることがわかった。

その結果を踏まえ、今年度は、新しい連携として注目を集めている、製造業と ICT 産業の連携状況について、北部九州と他の先進地域との比較分析を行い、異業種間連携による産業発展の可能性について調査・研究を行っている。その中間報告会として、北九州学術都市第7回産学連携フェアにおいて「北九州市における ICT 産業の裾野拡大と産学連携」と題してセミナーを開催した。このセミナーでは、北九州市における製造業と情報サービス業の融合による新たな創価の可能性を提示し、地域産業活性化に向けたクラスター形成の具体案について討議がなされた。以下に、その概要を報告する。

プログラム

【開 会】本台 進（国際東アジア研究センター研究部長）

【講演 1】

日本のコンテンツ産業の現状と地方分散の可能性

半澤 誠司（東京大学大学院総合文化研究科研究生）

【講演 2】

北九州市のコンテンツ産業と産学連携

梅本 克（国際東アジア研究センター上級研究員）

【講演 3】

デザイン産業と製造業の邂逅

池田 美奈子（九州大学大学院芸術工学研究院准教授）

【講演 4】

北九州市の ICT 産業と産学連携

亀山 嘉大（国際東アジア研究センター上級研究員）

【パネルディスカッション】

コーディネーター：亀山 嘉大（国際東アジア研究センター上級研究員）

パネリスト：池田 美奈子（九州大学大学院芸術工学研究院准教授）

梅本 克（国際東アジア研究センター上級研究員）

高垣 雅彦（日本橋 CG アニメ村村事務局長）

中澤 高志（大分大学経済学部准教授）



< 主催 > 財団法人国際東アジア研究センター

< 日時 > 2007 年 10 月 31 日（水）15:30 ~ 17:30

< 会場 > 北九州学術研究都市内 産学連携センター 中研修室

*産学連携フェアは、産学官連携を推進し、地域の付加価値の高い産業創出に寄与することを目的に、北九州学術研究都市で開催されています。

講演 1 (15:35 ~ 15:55)

半澤誠司「日本のコンテンツ産業の現状と地方分散の可能性」

この講演では、日本のコンテンツ産業の基本的理解のために、コンテンツ産業を構成する業種を細かく分類し、その分類に応じて、業種別の特徴や傾向が報告された。この理解に基づき、コンテンツ産業の地方展開（地方分散）の可能性が提示された。

日本のコンテンツ産業は国際競争力が強いというイメージがあるが、実際に国際競争力があるのはアニメやゲームなど一部の産業に限られる。これらの産業は東京への集積が顕著であるので、地方都市は他の方策を考える必要がある。既に発達した企業間ネットワークに基づく集積利益を有する東京に対抗して、地方都市でコンテンツ産業を振興していくためには、不利な条件をいかに克服するかが課題である。

地方が、東京のような大都市における産業集積により生じている不確実性低減効果に相当するものを提供する為には、地方における優秀な新卒者を、その地域のゲーム会社等のコンテンツ企業にインターシップのような形で、少なくとも1年程度雇ってもらうための補助を出すなどの策が必要である。そして、いたずらに東京の企業の事例を参考にするのではなく、地方でもできることを見定め、成功した地方の有力企業の事例を踏まえて、その経験を地域に還元していくことが重要である。

講演 2 (15:55 ~ 16:15)

梅本克「北九州市のコンテンツ産業と産学連携」

この講演では、地方都市でのコンテンツ産業の担い手として、メジャーな流通網や資本から異なった活動をしているインディーズクリエイターをいかに地方都市で活かすことができ

るか、北九州市の取り組みを具体的に紹介しながら報告が行われた。

インディーズコンテンツの中で比較的ビジネス化が遅れていたアニメーションでも、ウェブアニメーションの登場とその特性を活かすことにより、ビジネス化への道が開けた。北九州市に拠点を置くアジアアニメーション産業組織体（AAO）では、インディーズクリエイターを地元にはきをつけるため、様々なビジネスの機会、多様な相互交流の機会、好奇心を満たす刺激がある環境、開放的で許容度の高い環境の整備に尽力している。しかし、それだけでは不十分であり、今後、地方都市において創造的人材を集積させコンテンツ産業を創生させるために、産業界は地元のインディーズクリエイターにビジネスの機会を積極的に与え、行政はその活動に理解を示し、許容性のある都市づくりを目指していく必要がある。そして、教育機関は、クリエイターが創造性を発展できるように、新しい技術や表現の基礎研究とクリエイター育成教育に取り組む必要がある。

講演 3 (16:15 ~ 16:35)

池田美奈子「デザイン産業と製造業の邂逅」

この講演では、デザインとは何か、そのコンセプトについて説明が行われた。そして、製品を製造していく上で、製品付加価値のためにデザインがいかに重要かということが報告された。

デザインとは、必要性を考え、コンセプトをつくり、それを表現する方法を考え、モデルをつくり、検証し、最終的なスタイルを決めることである。それがデザインそのものの価値である。そのため、デザインの出発点は、私たちの社会や生活の中から課題を見出すことが肝心であり、デザインを考える上で「観察」するこ

とが重要であり、必然的に満ちだされたものがデザインである。

企業の生命線である「イノベーション」は、これまでは技術革新によるイノベーションを加速するため、技術・知識競争力をつける戦略がとられてきたが、今後は、デザインによるイノベーションへとシフトすることが重要となる。その例としては、「ウォークマン」や「iPod」、さらに「デザイン・ラダー」の概念がある。これらは、必ずしも新しいもの(方法)はないが、今後、重要となってくるデザイン志向によるイノベーションの典型である。デザイン志向によるイノベーションがいかにか起っているのかを知っておく必要がある。

講演 4 (16:35 ~ 16:55)

亀山嘉大「北九州市の ICT 産業と産学連携」

この講演では、都市システムの中で、北部九州(北九州市と福岡市)が必ずしもヒエラルキーの上位にいないことが説明され、その地位の向上(あるいは都市発展)のためには、地域、産業、企業、技術といった様々なレベルでデザイン(設計)力を強化していく必要があることが報告された。

クラスター事業に則って、地方都市の ICT 産業(情報通信産業)を発展させていくためには、個々の地域で、規模の経済と集積の経済を追求し、それらを有機的に作用させていく必要がある。北部九州の課題としては、規模の経済の視点では、継続して ICT 産業の企業立地を進めていくためにもブロードバンドのスピード向上により物的インフラの整備を行うことがある。集積の経済の視点では、企業間や産学間のネットワークを強化し、現在、点在している個々の技術、企業、大学・研究機関(実際の立地も含む)を繋げることで、集積による外部効果を高

めていく必要がある。

そして、規模の経済と集積の経済の追求にあたって、行政には地域のデザイン力を強化するための方策が求められる。一方、産業や企業には個々の市場創造性の高い技術の活用が求められ、そのためには、技術とデザインとの融合が必要である。

パネルディスカッション (16:55 ~ 17:30)

「デザイン・コンテンツの活用によるロボット産業の振興」

コーディネーター：亀山嘉大

パネラー：池田美奈子、梅本克、高垣雅彦、中澤高志



従来、ロボット開発は技術オリジンでデザインを決めているが、最近は、デザインオリジンで技術を決めているという事例も見られるようになってきている。パネルディスカッションでは、コーディネーターの亀山氏から、デザイン・コンテンツの活用によりロボット産業、さらには、地域振興は可能であろうか、という議題の提示があった。これを受けて、そのための課題や障害について、各パネラーから意見が出された。

各論としては、ロボット産業の新規マーケット創造をどのように行うか、コンテンツ産業と製造業の連携をどのように行うか、そのために、地域レベルの人材育成や教育支援でどのようなことができるか、といったことが議論された。

ロボット産業の新規マーケット創造につ

いて、中澤氏から、北九州市での情報サービス産業の現状は、ものづくりの生産設備を動かすためのソフトウェアを製作している会社が多くある。このようなソフトウェアは、目的がはっきりしており、意外性がまったくない。あつては困るものである。このセミナーで注目しているような新規市場は既存の情報サービス産業のアプローチでは対応できない領域である。新規市場は意外性の中から出てくると考えられる。そこでインディーズのような企業が、リスクを取りながら新規市場に参入する存在となり、このような産業の育成が欠かせないのではないかと意見が出された。

池田氏から、デザインはアートの要素もあるが、人の行動を観察し、社会を分析する中で必然的に導き出す地道な活動でもある。この後者の方法により、ロボットが必要とされる社会のニーズを把握していけば市場は開拓できるのではないかと。

コンテンツ産業と製造業の連携について、梅本氏から、コンテンツ産業だけではビジネスとして成立するのは難しい。製造業とコンテンツ産業が融合することで新たな展開が見込める。事例として、ユーザーのニーズを掴むため、ウェブアニメを双方向のコミュニケーションツールとして利用し、製品開発に活かしているもの等がある。

地域レベルの人材育成や教育支援について、高垣氏から、大阪市の日本橋の取組について報告があった。日本橋はもともと東京の秋葉原のような電気街であったが、大型量販店の進出で街が衰退していった。そのような状況下で、新しいまちづくりとして「ロボット」と「コンテンツ産業」を中心としたまちづくりに取り組んだ。もともと電気街であったので、既存の店をベースに3年程前から取組が始まった。人材

育成講座として、子供を対象とした「ロボット工作教室」を開催している。子供の教育を通して、この街に来る将来的にもお客さんやユーザーとなる人材育成が重要であると感じている。この教室で製作される「ロボット」は単純な構造のロボットであるが、この中から将来本格的な「ロボット」製作に取り組む人材も出てくるのではないかと期待している。

亀山氏から、地域産業を支えるための人材育成として取り組まれている長野県諏訪、岡谷での「ロボット」に関する小学生工作教室の事例の紹介があった。

このような活動を通して、産業用ロボットと併せて、ホビー用ロボットのような我々の生活に密着したようなロボットの需要も今後出てくると感じている。

パネルディスカッションを通しての、コーディネーター、パネラーからのメッセージとしては、地域、産業、企業、技術といった様々なレベルでデザイン（設計）力を強化していく必要があるが、そのためには、これまでに想定されていなかったような、産業同士、企業同士、技術同士で、新しい組み合わせを考えていくことが重要である。デザイン・コンテンツ産業には、そのための可能性が秘められており、それをいかに上手く活用できるかが鍵となるであろう。